

コンプレックスが 幸福のチャンスに 変わる本

～欠点が僕に与えてくれたもの～

売れっ子Kindle作家 大矢 慎吾

西穂高岳独標ニセ〇M

「自分の事が
好きになれない。」

そんなあなたに届けたい、
87歳で睡眠薬を飲んだおばあちゃんとの
命をめぐる物語。

プロローグ

もしも、親の愛情をもう少し^{ちが}違うカタチで受けていたら、僕はすでに死んでいるか、もしくは、犯罪者になっていたかもしれないな…

目の前に^{ころ}転がった”辛口”の^{いっしょうびん}一升瓶を見つめながら、ふと、そんなことを思った。

かなり前に「ノートに名前を書けば相手の命を^{うば}奪うことができる」という漫画が^{だいいりゅうこう}大流行し、^{じっしやばん}実写版の映画にまでなった。その映画を当時の彼女と^み観た帰り道、僕は、二時間溜め込んだ感情を一挙に^{いっきよ}吐き出した。

^{かんたん}「簡単に殺しやがって…あんなの何が面白いんだよ！」

その吐いて捨てるような言い方に、彼女は^{とうわく}当惑の表情を浮かべていた。

けれどあの時に僕が^だイラ立っていたのは、次々と殺人を犯す^{おか}智能犯と^{ちのうはん}名探偵の^{めいたんてい}知恵比^{ちえくら}べのようなゲーム^{びようしゃ}描写が気に入らなかったからではない。^{ごくあくにん}極悪人は死んで当然だという、主人公の^{かたよ}「偏った考え方」が、自分の中にあるものと^{かさ}重なったからだ。

^{じよばん}序盤は無罪^{むざいほうめん}放免となった^{じじつじょう}事実上の犯罪者を^{さば}裁いていた主人公の正義感^{せいぎかん}は、物語が進むにつれて^{しゅうばん}暴走していき、終盤では、その正義のために^{せいさい}実の父親までもを手にかかけようとする。だけど結局は制裁を受け、^{ほろ}”悪は滅びる”というお決まりのパターンよろしく、苦しみながら^{さいご}最期を迎えた。

それをわかりやすいストーリーで見せられると、なんだか自分が^{さと}諭されているような気になってきて、虫^{むし}唾が走ったのだ。

僕には中間（ちゅうかん）というものが無い。

白か黒、マルかバツ、好きか嫌い、イエスかノー、やるかやらないか、
どんな時も二つに一つで曖昧あいまいなものはない。だからおそらく、わからないのかもしれない。

そう、僕にはわからないことだらけだ。

嘘、冗談かげぐち、陰口あいづち、駆け引き、親友、派閥はばつ、場の空気せけん、世間話あいそ、愛想笑い、適当な相槌あいつち、悪くもないのに謝罪する意味、謙遜しなければいけない理由てきとう、適当にやってと言われた仕事き、気乗りしない誘いことわの断り方…

あ
挙げ出したらキリが無い。これまでの人生で何度も同じ場面ばめんに出くわし、その都度つど、必死に考えてみたけれど、わからないものはどれだけ考えてもわからない。

やっぱり僕には『ヒトの気持ち』が全然わからない

今回のことは、自分がどうにかしなければいけないと思っていた。だから今日まで、誰だれよりも話をしてきたし、誰だれよりも、喜ばせてきたつもりだ。しかし結局は、それも、ただの思い違いちがだったのかもしれない。

これ以上、僕はおばあちゃんに何なにが出来るのだろうか？

おばあちゃんは、一体、何なにに苦しくるんでいるのだろうか？

おばあちゃんが求めているものは、一体、何なんなのだろうか？

他人の気持ちがわからない僕に、おばあちゃんは救えないのだろうか？ ヒトに共感^{きょうかん}することの出来ないヤツにヒトを救^{どだい}うなんて、土台無理な話なのだろうか…クソッ、どうしていつもうまくいかないんだ！

頭^{かぶり}を振り、転が^あっていた一升瓶^{ひろ}を拾^{しずく}い上げると、そのまま口^あに充て^{つた}て”ポンポン”と底^たを叩いた。最後の雫^{しずく}が喉^{のど}を伝^{つた}う冷たい温度を感じる。

恐^{おそ}ろしい。飲^あむ量^{かい}はかなり増えているのに、どんどん酔^よえない体になってきている。相変^あわらず、ヒトの体は心とは正反対^{きび}に出来ているらしい。強くて、そして、厳しい。

こんな毎日が無意味なことは自分でもわかっている。

だけど僕は、どうしようもなく悔^{くや}しいのだ。悔^{くや}しくて悔^{くや}しくてたまらないのだ。もしも他の誰^たかだったらここまで悔^{くや}しいと感じることはない。単^{たん}に親戚の一人に同じような事故が起こったとしても、僕がここまでの行動を起こすことはない。

相手はあのおばあちゃんだ

このまま放^{ほお}っておくことなんて、絶対に、出来るわけがない

もういっそのこと、洗いざらい忘れてしまえば楽になれるのかもしれない。おばあちゃんを襲った出来事も、これまでに僕がおばあちゃんにしてきたことも。

そしてあの時、僕を暗闇から解放してくれた、おばあちゃんに対する感謝の気持ちさえも……

〔目次〕

プロローグ

1-1 1-2 1-3 1-4 1-5 1-6

2-1 2-2 2-3 2-4 2-5 2-6

3-1 3-2 3-3 3-4 3-5

4-1 4-2 4-3 4-4 4-5 4-6

5-1 5-2 5-3 5-4 5-5 5-6

エピローグ

あとがき

1

1-1

……僕が生まれ育ったのは田園風景の広がる小さな田舎町だ。

近隣に電車の駅はなく、市街地に向かうバスも2時間に1本程度しか走っていない。

朝は黒い学生服に身を包み、白いヘルメットを被った近所の学生が、せっせと自転車を漕いで田んぼの間を駆け抜けて行く。道には街灯も商業施設も無いため、夕日が沈むと、町は真っ暗闇に包まれる。

多くの家が田んぼに隣接していて、ベッドに入ってから、一晩中、外にはカエルの鳴き声がやかましく響いている。慣れていないと不快に感じるその鳴き声も、小さい頃から聞いているうちに、妙に落ち着く音に変わっていくのだから不思議だ。

5月から6月にかけて田んぼに植えられた苗は、夏を越す頃には立派な稲穂を实らせる。その時期には、風に揺れる稲穂の心地良い音色に町全体が包まれる。学生の頃、ちょうど学校から帰ってくる時間には、夕日を背にしてオレンジ色に染まった稲穂たちが、風に揺られてサラサラと音を鳴らして僕を出迎えてくれた。それがまるで「お帰り」と言われているみたいで、少しだけ、温かい気持ちになれた。

小さい頃の遊びといえば、山の中に秘密基地を作ったり、川で釣りをしたり、あとはドッジボールやサッカーなど、体を動かすものばかりだった。携帯型のゲーム機はおろか、家庭用のゲーム機もまだあまり普及していなかった時代だ。当然、スマートフォンも携帯電話も無い。

友達の家遊びに行った時には、よく「子供は外で遊んできなさい」と言われていた気がする。みんな顔見知りだったので、近所のおじさん

やおばさんにもよく怒られた。女の子たちと一緒に野球やサッカーをしていた記憶もある。

そんな田舎の小学校というのは、1つの学校に、かなり広いエリアから子供が集まってくる。子供の数が圧倒的に少ないからだ。それにかかにも関わらず、僕の通っていた小学校は1学年に1クラスしかなく、1学年には30人くらいの生徒しかいなかった。

つまり小学校の6年間で、まったく同じメンバーで過ごすことになったのだ。

僕は6年かけて自分のことを知った。まるで、ジグソーパズルを組み立てるようにして。

最初の頃には「完成図」があった。ハッキリとしたものではないけど、強くて、カッコよくて、心がワクワクするようなものだった。卒業文集に書き記す将来の夢のような、希望に満ちた"理想の自分像"が、最初は確かにあったのだ。

だけどパズルが組み上がっていくうちに、少しずつ違和感を感じるようになった。段々と明らかになる自分のパズルが、どうも他の子たちとは、少し、違っていたからだ。

低学年の頃はそんなこと気にも留めなかった。けれど、1つ歳を取れば1つ大人になるみたいに、パズルのピースが1つ、また1つと組み上がっていけば、いつか他の子と自分の違いには否が応でも気が付いてしまう。

どうして自分は、他の子よりもこんなに劣っているのだろう？

その思いは、どんどん強くなっていった。

パズルが完成する頃には、その思いはすでに確信^{かくしん}に変わっていて、他人との違いに愕然^{がくぜん}とし、自分が心底^{しんそこ}嫌いになってしまう…小学校で過ごした6年間というのは、僕にとって、まさにそんな感じだった。

とはいえ…最初からそうだったわけではない。

そもそも僕には『欠点』なんて、まったく見当^{み あ}たらなかったのだ。

運動神経^{ばつぐん}は抜群で、何をやっても他の子には負けなかった。体育祭ではずっとリレーの選手に選ばれ続け、アンカーを任されたこともある。サッカーではボールを独り占め^{ひと じ}してゴールを量産し、ドッジボールではコート用最前列に立ってゲームをコントロールしていた。

基本的に体を動かすことはなんでも得意で、たとえ経験がなくても、少しやればすぐにコツ^{つか}を掴んでしまう。

体力テストではすべての項目で上位を独占^{どくせん}した。野球経験のまったく無かったソフトボール投げの種目では、ボールを握ったその場で、遠くに投げる理想的な投げ方を、瞬時にイメージすることが出来たのだ。

なかでも、特にズバ抜けていたものがある。

それが「縄跳^{なわ と}び」だった。

1-2

縄跳^{いっしゅ}びは一種のブームだった。

休み時間になると、運動場だけでなく、体育館や校舎裏^{うら}の駐車場などでも、縄跳びを跳^とんでいる子たちをたくさん見かけた。大げさでもなんでもなく、運動場だけではスペースが足りなかったのだ。

ランドセルの側面^{そくめん}に色鮮やかな縄跳びをくくり付けるのも、当時はかなり流行^はっていた。男の子なら緑か青、女の子ならピンクか黄色といった具合に、キラキラ模様^{もよう}の入った蛍光色のゴム縄跳びが、スーパーでも当たり前^あ前に売られていたのだ。

縄跳びは「前まわし」か「後ろまわし」かのどちらかで跳ぶ。

1回跳んで縄を1回まわす、という通常の跳び方をベースとして、様々な「技」を盛り込^もんでいくのが、腕^この見せ所^{どころ}だ。

手をクロスさせて縄をまわす「交差^{こうさ}とび」
通常とびと交差とびを交互に跳ぶ「あやとび」
空中で縄を2回まわす「二重^{にじゅう}とび」

このあたりがもっとも一般的な技だ。

おそらく縄跳びが得意かどうかは、二重とびが跳べるかどうか、一つの目安^{めやす}になると思う。あやとびや交差とびは跳べるけど、二重とびは跳べないという子が多かったからだ。二重とびを30回以上連続して跳ぶことが出来れば、そこそこ運動神経が良い小学生ということになるだろう。

だけど僕は、そんな周りの友達^{あざわら}を嘲笑^{あざわら}うかのように、“ケタ違いに”出来る子供だった。

なにせ友達が二重とびだ何だと浮かれている中、僕は余裕の顔をして「三重とび」を跳んでいたほどだ。初めて縄跳びを握ったその日に、基本的な技は、すべて習得してしまった。

自分が習得した技を塗り潰していくカードが、全校生徒に配られていたけど、そんなものはその日のうちに制覇し、とっくに教師から"花丸"をもらって捨ててしまった。誰も出来なかった難易度の高い「交差二重とび」や「あや二重とび」なども、教師の見本を見た次の瞬間には、もう跳べていた。

縄跳びが僕たちの学校に一人のヒーローを誕生させた

ある日の昼休みだった。

一人で縄跳びを跳んでいると、クラスの男性担任教師が声をかけてきた。

「慎吾くん…それ、誰から教えてもらったの？」そのただでさえ大きい担任の目が、この時は驚きの表情と共に、いつにも増して大きく見開かれていた。担任は僕の縄跳びのことを言った。

「四重とび」までマスターしてしまった僕は、通常の跳び方には飽きてしまい、自分だけの技を模索するようになっていた。普通に縄をまわすだけでなく、まるで縄跳びを使った演舞のように、ちょっとした動きを織り交ぜながら跳んでいたのだ。そんなお遊びで跳んでいたものが、珍しい縄跳びの技の一つだったらしい。担任が体育の先生だったこともあり、縄跳びについては、色々と詳しくあったようだ。

学校で誰も教えていない技だったからなのか、この時、担任はものすごく興奮していた。どうしてそこまでの展開になったのか、後日、みんな

なの前で発表することが決まったのだ。それを僕に告げた担任の声は、かなり上^{うわ}ずっていた。

僕は嬉しかった。

自分にとってはなんでもないことでも、大人から褒^ほめられると、途端にすごいことのような気がしてきたのだ。

小学校では毎月１回、全校集会が体育館で行われていた。

全校集会は校長先生の話に始まり、生徒指導の先生や、各委員会の生徒からのお知らせなどが、壇上^{だんじょう}で報告される。そんなタイムテーブルの合間^{あいま}に、担任教師は、僕の縄跳びの技を披露する時間を盛り込んだ。

１学年１クラスしかない小さな学校とはいえ、生徒が一堂^{かい}に会する。当然、１年生から６年生までの全員が、目の前にある一つの舞台に注目するのだ。舞台上^{じょう}には、見ている側^{がわ}の時には気が付かなかった、独特の緊張感^{ただよ}が漂っていた。

そんな中、マイクを握って登壇^{とうだん}した担任が、満^{まん}を持^じして僕を紹介した。

「みなさんこんにちは。今日はちょっと、紹介したい子がいるんです」

担任の後ろについて壇上^{だんじょう}に上がった僕に、全校生徒の視線が一斉に向けられた。

「５年生の大矢慎吾くんです。慎吾くんは、縄跳びがとても上手です。ちょっと跳んでみて下さい」

少し緊張気味に、結^{むす}んであった縄跳びを解いた僕は、絡^{ほど}まった部分に足^ひを引^かっ掛けないよう、念入^{ねん い}りにゴムチューブを引^ひっ張^はって準備^{ととの}を整えた。

まず手始めに、二重とびを跳んだ。

すると、その時点でもうすでに、体育座りをしている前列の下級生たちから、「おお」という歓声^もが漏れた。

次に「あや二重とび」「交差二重とび」を披露すると、後列に座っている上級生たちからも、波が押し寄せるようにしてどよめきが起こった。

そして、学校では僕一人しか習得していなかった「四重とび^{よんじゅう}」を披露する頃には、全校生徒200人の集団が、前のめりになって僕に視線を向けているのがわかった。

「いやあ、すごいですね。それでは最後に…イナズマという技です。どうぞ！」（技の名前には地域性がある）

マイクから聞こえた”イナズマ”というワードに少し失笑^{しっしょう}が生まれるも、そこにいた全員が、間違いなく、その瞬間^わを待ち侘びていた。

僕はいつも通りに縄跳びをまわし始めた。すると…

『おお——、すげー！』

『キャ——、すごーい！』

僕の体^{ちゅう}が宙^うに浮くや否^{いな}や、割れんばかりの拍手^わと大歓声が、体育館内を一瞬にして包み込んだ。

”ヒュンヒュン！ ヒュンヒュン！ ヒュンヒュン！”

その歓声と拍手はさらに大きくなっていき、それに^{こた}えるように僕は、わざと大げさな動きで跳んでみせた。そしてその大歓声は、跳び終わった後にもしばらく続き、僕はそれを^{ぞんぶん}存分に浴びるようにして、しばしの間、目を^{つむ}瞑っていた。

その時間を十二分に^{じゅうにふん たんのう}堪能した僕は、縄跳びをたたんだ後も、まんざらでも無い表情を浮かべていた。そして自信満々に正面を見据え、^{み す だんじょう}壇上から体操服姿の大衆を見下ろしながら、こう思ったのだ。

そうか、僕は特別なんだな

それは^{なっとく}納得に似た思いだった。

自分はここに立つべくして立っているような、そんな気がしていたのだった。

次の日から、学校における僕の"ポジション"は変化した。

僕の存在は、もはや、全校生徒の知るところとなり、昼休みになると、多くの下級生たちが、声を掛けてきたのだ。

「慎吾くん、見て見て！」キラキラと目を^{かがや}輝かせた男の子数人が、縄跳びを持って現れ、目の前で未完成のイナズマを披露した。きっと、数日前に見た映像を^{まぶた}瞼に焼き付け、夢中で自主練習に^{はげ}励んだ結果なのだろう。

「全然ダメだね」僕は思ったことを口にした。

それからもしばらくは、^{いた}至る所で下級生に呼び止められた。そしてその^{たび}度に、彼らは未完成のイナズマを披露し、僕からのダメ出しを受けることになった。

「クソッ！ もうちょっとなのにな…」その悔しそうな男の子たちの顔を見ていると、僕は絶対的な^{ゆうえつ}優越感に^{ひた}浸ることが出来た。

そう、彼らはひたすら僕を目指しているようだった。

それはそうだろう。このポジションの快感を知ってしまった僕には、そうなる彼らの気持ちがよくわかった。

みんな舞台の上に立ちたいのだ。^{だんじょう}壇上^あに上がり、全校生徒からの注目^{かっさい}を一点に集めたいのだ。そしてあの拍手喝采を浴びながら、^{ぞんぶん}思う存分、輝いた自分の姿をみんなに見せつけたいのだ。

残念だけどそれはきっと難しいと思う

それが出来るのは、みんなと違う、僕だけだから

1-3

単に運動神経が良いだけだったならば、もっとずっと早くに、パズルは完成していたと思う。

僕は勉強をしたことがなかった。友達の影響で始めた通信教育の教材も、一度も開封することなく、ゴミ箱に^{ちよっこう}直行させた。^{よう}要するに、一人で机に向かって学習する"勉強の努力"を、僕は知らなかったのだ。

ただそれも、ある意味で当然だった。そんな努力は不要だったから。

ある日の算数の授業では、教卓に堂々と腰を下ろし、「まだですかー？」とクラスメイトを挑発していた。もちろん僕は、自分からそこに座ったわけではない。

「慎吾くん、先生になってみる？」教師から、そう任命されたのだ。

この日の算数の授業では、計算ドリルを解く予定になっていた。

いつものように教室に入ってきた女性教師は、チャイムが鳴るや否や、すぐに黒板の方をクルリと向いた。そして「ここから、ここまで」というページ数を書き残すと、さっさと隅っこの机に引っ込んでしまった。

「今日は自習にします。黒板に書いた、あの中の問題を出来るだけ解いてみて」

黒板を指差してぶっきらぼうにそう言うと、その先生は、分厚いファイル^{ぶあつ}を机に積み上げ、黙々とデスクワークを始めた。

"自分たちで勝手にやっというところだったのだろう。おそらく黒板に書いたページ数も、誰も終わらないボリュームを想定して書いたのだと思う。"

ところが、開始から30分も経たないうちに、僕はすべての問題を解き終えてしまった。

「せんせー、終わったけど、どうすればいい？」

僕が手を挙げ、大きな声でそう叫ぶと、教室はにわかにザワつき始めた。先生が無言で手招きをしたので前に向かう。この自習時間の開始直

後から、"誰が早く解き終わるか?"という競争が始まっていたのは、なんとなく気付いていた。

「適当に答えを埋めたんじゃないでしょうね？」

先生は眉をひそめ、怪しんだ様子で僕を覗き込んだものの、教師だけが持っている解答を取り出し、黙々と答え合わせを始めた。

…が、誤答など、あるはずが無い。

答え合わせを終えた先生は、下を向いたまま、しばらくの間、沈黙していた。そして、何かを思いついたように顔を上げると、笑顔を作ったのだった。

「慎吾くん、先生になってみる？」

子供ながらに、その顔は何かを含んでいる感じがした。その意図はよくわからなかったものの、先生が提案してくれたことは、僕の自尊心を大いにくすぐった。もちろん、断る理由などは無い。

僕が教卓に座る様子を見たクラスメイトたちは、あきらかに動揺していた。「えっ？ あれ、いいの？」そんな戸惑いの声も、後ろの方からは聞こえていた。だけど、そんな反応などはお構いなしに、僕は先生の指示通りに動いた。

教卓に腰を下ろし、ゆっくりと教室を見渡してみた。

…やっぱり、僕はみんなと違うんだな

ときおり
時折、顔を上げ、チラリとこちらを見る友達がいる。だけど、僕が顔を向けると、まるで隠れるように下を向いてしまう。

その様子に、僕はたまらない快感を覚えた。

最初は教卓に座るのも気分がよかった。だけど5分経っても、10分経っても、誰一人として、前に出てこない。

しだい
次第に、僕はイラつき出した。

退屈だったこともあるけど、それだけではなかった。クラスメイトたちが、なぜこんな簡単な問題にいつまでも手こずっているのか、僕には理解が出来なかったのだ。

なぜ、こんなことも出来ないのだろうか？

そのうち、ジッと座っているのがバカバカしく思えてきた。なんだから、みんなが僕に答え合わせをされるのを、嫌がっているような気がしてきたのだ。

その状況に腹が立った僕は、いつも授業中に女性教師がやっていたように、人差し指で教卓を”カンカン”と叩き出した。甲高い音に反応した何人かがこっちを向く。

『まだですかー？』

あお
煽るようにみんなを挑発したところで、ちょうどチャイムが鳴り、この時間の終わりを告げたのだった。

1-4

どう考えても自分は”特別”だと思った。

全校生徒が注目する舞台に一人で登壇^{とうだん}し、教師から代役を任命される。そんな友達は、誰一人としていなかったからだ。

だからこそ不思議で仕方がなかった。

どうして自分より、勉強も運動も出来ない子の机には、いつも、周りを囲うようにして友達が集まってくるのに、自分の周りには、あまり友達が寄ってこないのか。

昼休みや放課後は違った。僕がサッカーボールを持って校庭に出れば、みんなが自然と集まってきて、いつの間にかサッカーが始まる。ドッジボールやバスケットボールも同様だ。僕が校庭に向かえば、「今日は何するの？」と、いつも誰かが声をかけてくるのだ。だけど教室では同じようにならなかった。

僕はその状況が、どうしても気に入らなかった……

[続きを読むにはこちら](#)

【Kindle本は端末がなくても無料アプリですぐに読めます】

[アプリのダウンロードページ](#)